蛆

及ばぬあたりのことは、猶心にてみ給へかしと、いひしものありけり、

〔關の秋風〕蠅てふ虫は、またなくにくし、畫ぬの夢妨ぐるは、怠りを諫むるともいふべければ、咎めむやうもなし、たゞ書なんど見畫なんどかくころ、顏のあたりに一つ二つとまるを、おひやれば、しばしかなたへうつり、また飛來り飛去り、はては友多くつどひて鬪諍し、あるはえもいはぬふるまひいと狼藉也、

〔新撰字鏡 虫〕蛆 子餘反、宍中蟲也、痛也、蝍也、吳公也、螫也、止加介、蝍 旦鹿反、去、字○自、

〔倭名類聚抄 十九 蟲多〕蠅 ○中略 聲類云、胆 ○音且、又去聲、和名波閉乃古、蠅子也、說文云、蠅乳肉中也、

〔箋注倭名類聚抄 八 蟲名〕李時珍曰、蛆胎生、蛆入灰中、蛻化爲蠅、如蚕蠶之化蛾也、

〔圓珠庵雜記〕虫の字、むしともうじともよめど、うじはきたなく、むぐめくをいひて、歌にはよまず、新撰字鏡云、蝍 字自 とあれど、蛆の字をよみきたれり、本草云、蛆蠅之子也、凡物敗臭則生云々、

〔和漢三才圖會 五十二 卵生蟲〕蛆 音疽 蛆 胆 本字 和名波閉乃古、俗云宇之、○中略

按蛆字、本作胆、蠅乳肉中故从肉、

素問類經云、蛆性喜暖畏寒、火運之年尤多也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十七 卵生蟲〕蛆 ハヱノコ 和名鈔 ウジ ○中略

諸蠅皆蛆ヲ生ズ、殊ニ大麻蠅多ク生ズ、夏秋ヲ時食物ニ集レバ、至小ノ卵ヲ遺シ著クルコト、甚ダ數多シ、初其卵ハ動カズ、暫クシテ能行ク、其形一頭ハ細ク尖リ、一頭ハ齊シクシテ截タルガ如シ、長サ一二分、是ヲサシト云フ、書隱叢說ニ、蠻子化蠅ト云フ是ナリ、數日ヲ經テ形漸ク大ニナリ、變ジテ五六分ノ長サ、二三分ノ濶サニナリ、色白クシテ一條ノ細キ尾アリ、長サ一寸許、此蟲糞缸中ニ別シテ多シ、是糞中蛆ナリ、俗名カミサゲムシ、京 カミナガムシ 筑前 ドブムシ 豫州 ウナゴゼ 勢州 ウナゴシ 松坂 ヲナゴシ 同上 ウナガジ 山田 ウナガジ 雲州 ヲナガジ 同上 ヲナゴゼ 筑後 ヲナ